

序

立教学院院長・立教大学総長 西原 廉 太



この度、『立教学院百五十年史』第一巻が発刊されますことを、心よりお慶び申し上げます。立教学院百五十年史編纂委員会、立教学院史資料センターのみなさんをはじめ、貴重な時間と労力を割いて刊行にご協力いただいたすべての方々に、心からの敬意と感謝を申し上げます。

私立学校にとってその生命線は、創立以来の「建学の精神」を不断に確認しながら、それを時々の時代状況の中でいかに革新的に解釈し続けられるかにあると言っても過言ではありません。そこで重要なことは、その「建学の精神」理解が、限りなく正確な自校史に基づいて語られることにあります。この意味で、『立教学院百五十年史』は、今後、立教学院に属し、立教学院を担っていくすべての者が常に立ち帰るべき基盤的文献となることは間違いありません。

これまで、立教学院の年史としては、『立教学院設立沿革誌』（一九五四年）、『立教学院八十五年史』（一九六〇年）、『立教学院百年史』（一九七四年）、『立教学院百二十五年史』（全五巻＋図録、一九九六～二〇〇〇年）があります。『立教学院百五十年史』は、『立教学院八十五年史』、『立教学院百年史』に次ぐ「通史」となります。『立教学院百二十五年史』は、「資料編」となりましたので、今般の『立教学院百五十年史』編纂にあたっては通史の刊行を大きな目標として設定しました。また、これまで未掲載であった資料や新たに発見・整理された資料群を採録する資料集も刊行することとしました。

二〇〇一年一二月、立教学院は大学内に立教学院史資料センターを新設し、二〇一一年に立教学院百五十年史編纂委員会、同専門委員会が設置され、新たな年史の刊行に向けた体制が整いました。同センターでは、立教学院

関係資料の収集・整理、プロジェクト設置等により学院史に関する研究を進め、データベースによる公開もなっています。また、二〇〇二年度からはセンター紀要である『立教学院史研究』を創刊し、随時、貴重な史料や、研究成果を公開しています。

同センターの刊行物として、『立教大学の歴史』(二〇〇七年)、『立教学院一五〇年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成(抄訳付)』(全五巻+別巻、二〇〇九〜二〇一五年)をはじめ、二〇一三年には、日本聖公会京都教区から本学院に移管された「ウィリアムズ主教資料」を基にして作成された『C・M・ウィリアムズ資料図録』(二〇一六年)等があり、いずれも重要なテキストとなっています。

立教大学を創設した聖公会の考え方を表現してきた言葉にVIA MEDIAというものがあります。ラテン語で「VIA」というのは道です。「MEDIA」というのは真ん中という意味です。直訳しますと「中道」となります。聖公会は、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の中間であるという意味で、よくこのVIA MEDIAは用いられます。しかしながら、VIA MEDIAの本来的な意味とは、「私たちは真理を求め旅人だ」ということです。私たちは、聖書や伝統、そして理性を道標にしながら真理を求めて旅をし続ける旅人、不断に歩み続ける旅人だというのが、このVIA MEDIAの正確なニュアンスです。

そういう意味で、聖公会はあらゆる絶対主義をとらない教会であると言えます。最終的な真理は、神のみが知っている。そこで、私たちの任務とは、聖書・伝統・理性という道標を頼りにしながら、解釈し続ける、歩み続ける、真理を求めて旅をし続けることに尽きるのです。これこそが聖公会のVIA MEDIAの精神であり、私たち立教学院の「建学の精神」の深奥にある基盤に他なりません。あらためて本書を通読する時に、私たち立教学院の百五十年が、まさしくこのVIA MEDIAの道行きであったことを確かめることができます。

人類が築きあげてきた「知」の体系に対する深い造詣と、これを現実の世界、社会の中で適応していく力を持ちうる「ひと」を生み育てる「場」として、私たちの立教学院は存在しています。立教学院がこれからも、深いところで真理を探索し、この世界、社会、隣人に仕える人々を育ていくという「ミッション」を誠実に担い続けることができますように、祈り、願います。

自由な校風が育んだ「立教らしさ」

立教学院理事長 福田裕昭



立教学院の創立者、チャニング・ムーア・ウィリアムズ（一八二九～一九一〇年）は日本語が堪能な米国人宣教師で長崎在住時代、高杉晋作と会い、アメリカ政治の事情を尋ねる高杉に一般市民でも大統領になることが出来ると伝えています。また早稲田大学の創設者・大隈重信は、長崎でウィリアムズから英語を教えられたと回顧しています。そして郵便の父・前島密に米国の郵政制度などを伝授したのも、ウィリアムズだということです。明治維新へ向かっていく激動の時代、ウィリアムズは多くの日本人に対して大きな影響を与えたと推し測ることができます。

しかし、ウィリアムズは自らの功績を流布させるようなことを好まず、遺言状で自らの書簡の出版を禁じ、手紙の類も多くを焼却しています。米国リッチモンドにある墓地には、「道を伝えて己を伝えず」と刻まれた墓碑銘があります。これはウィリアムズが生涯貫いた謙虚な生き方を物語り、立教の建学の精神の根幹をなすメッセージと呼べるものです。利己心や虚栄心を排し、相手を尊ぶ穏やかな人間性¹¹立教生のスタンダードはこうして導かれたのだと考えられます。

その後、数十年を経て、ある学生が「立教らしさ」を綴りました。一九二七（昭和二）年、当時立教大学生だった武藤重勝氏（元立教大学図書館副館長）が受験雑誌に発表した「自由の園の知識と魂の母」という文章です。武藤氏は、以下に記すように立教を生き生きと伝え、「自由の学府・立教」を熱烈に推奨していました。現代文に変えて以下に記します。

……池袋の駅を出てしばらくでも歩いて見たまえ。四、五丁（二丁＝一〇九メートル）も町を抜けると、左手

に素晴らしい赤レンガの洋館を見ることが出来るだろう。異国情緒の匂いと、静かな楽園への気持ちとに
いっばい充たされた（中略）私たちはあまりに人生そのものに疲れている。ただでさえいらいらした人生に
あつて、単純な瞑想もあつてはいいのではないか。私たちの未来は常に希望に、また力と生命とに充滿した
ものでなければならぬ。この意味で、私は宗教に縁の薄い人にも、礼拝堂の雰囲気はおすすめする。けれ
ども改めて言うが、大学における宗教は自由である。礼拝堂に出入りしようがしまいが、またはクリスチャ
ンになるうがなるまいが、諸君たちの生活から割り出して、好いと思う方に進めばいい。大学はこの点で自
由である。キリスト教徒もまた異教徒も常に同じく包含されて行く所に大学としての真面目しんめんもくもある（中略）
学園の扉は自由である。将来、官界に、実業界に、経済界に、または文壇の中原に乗り出さんとするもの
よ。来れ、自由の園、「立教大学」に。そしてあくまで、清い、高い意味での自由人になるうではないか。
勇ましい新鮮な思想の文化人になるうではないか

「立教らしさ」の基礎となる「自由な校風」は百年前も今も同じ輝きを放っています。

大正デモクラシーをしなやかに体現していた「自由の学府・立教」は、やがてアジア・太平洋戦争の渦に巻き
込まれていきました。一九四五年、日本は敗戦を迎え、立教大学は民主主義の学び舎を取り戻しました。そして
一九四六年度には、女性四人が入学し、今では全学生の過半数に達しています。東京・築地に開校した生徒数人
の小さな私塾は、今では小学校から大学院までを擁する国内有数の学校法人として、発展し続けています。この
『立教学院百五十年史』には様々な困難と向き合う先人たちの歩みが集録されています。創立以来の歴史と伝統、
立教学院及び各学校のこれまでの史実について、皆様のご理解を深める一助になれば幸いです。

池袋キャンパスのタッカーホール入り口で、「PRO DEO ET PATRIA」と記された碑を見かけた方は多いと思
います。直訳すると「神と国のために」というラテン語ですが、立教ではこれを「普遍的なる真理を探究し、私
たちの世界、社会、隣人のために」と捉えています。

先人たちによって育み受け継がれてきた建学の精神を大切にしながら、未来への歩みを止めることなく、皆様
とともに新しい立教を創っていききたいと存じます。

「立教史研究」の到達点

立教学院百五十年史編纂委員長 老川 慶 喜



立教学院は、アメリカ聖公会の宣教師C・M・ウィリアムズ主教が築地に私塾を開設した一八七四年を創立年としていますので、二〇二四年には創立一五〇周年を迎えます。小さな私塾が、一五〇年という時を経て、小学校から大学・大学院までを擁する、大きな学院に成長しました。本書は、その立教学院の歴史のうち、戦前期の旧制時代を扱ったもので、戦後の新制時代の歴史は一九六七年までを第二巻、それ以降を第三巻として刊行することになっています。

かつて、『立教学院百年史』の編纂委員長であられた海老沢有道先生は、同書を刊行したのちに「どうか創立百年のこの機に当たり歴史に輝く立教にふさわしい学院資料室が創設せられ、立教及び聖公会関係の一切の文献・記録・写真・遺物などが網羅的に蒐集・整理されるよう願ってやまない」（寺崎昌男・別分昭郎・中野実編『大学史をつくる』東信堂、一九九九年）と述べておられます。『立教学院百年史』を編纂されて、立教学院史関係資料の蒐集・整理の必要を痛感されたものと思われれます。

そうした提言を踏まえて、『立教学院百二十五年史』の編纂では資料の蒐集・調査に重点を置き、全五巻からなる資料編を刊行しましたが、通史編の刊行は見送られました。この段階で通史を執筆しても、『立教学院百年史』の水準を超えるのは難しいだろうという判断があったからです。

『立教学院百二十五年史』の編纂が終了したのち、二〇〇〇年二月に立教大学内に立教学院史資料センターが設置され、立教史関係資料の収集・整理・保存と立教史の研究を恒常的に営む体制が整いました。学院史資料センターでは、立教学院にかかわる資料の調査や関係者からのヒアリングなどを積極的に進め、「立教学院と戦

争に関する基礎的研究」、「立教築地時代の研究」、「遠山郁三日記研究」、「立教中学校関係資料研究」、「宣教師関係資料研究」、「立教学院の戦後」などの研究プロジェクトを実施してきました。その成果は、学院史資料センターの研究紀要『立教学院史研究』などで発表されるとともに、『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』（東信堂）などの論文集、『遠山郁三日記 一九四〇～一九四三年』（山川出版社）や『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成』（全五巻、別巻一冊）などの資料集としてまとめられてきました。また、自校史教育の一環として開設された、大学の全学共通カリキュラムの講義「立教大学の歴史」のなかで、広く学生にも還元されています。

こうしたなかで、二〇一〇年七月に立教学院百五十年史編纂委員会が発足しました。二〇二〇年から新型コロナウイルスによるパンデミックに襲われ、一年遅れてしまいました。何とか「立教史研究」の到達点を示せたものと安堵しております。ご執筆いただいた先生方をはじめ、『立教学院百五十年史』の編纂にご理解とご協力をいただいたすべての方々から謝意を表します。とりわけ、前立教学院院长・広田勝一先生には、企画の段階から有益なご助言をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

『立教学院百五十年史』は、近現代日本の社会変動と国際環境の転変のなかで、教育・研究機関としての立教学院がどのような社会的・文化的役割を果たし、どのような人間を育成してきたのかを事実にもとづいて明らかにすることを課題としています。執筆の過程で、アメリカ聖公会と立教学院の関係をはじめ、立教学院史に関する多くの事実が明らかになりましたが、それでもこれまでの調査や研究には時代やテーマによって濃淡があり、なお事実が十分に解明されていない箇所もみられます。しかし、それは『立教学院百五十年史』を編纂したからこそわかったことですので、今後の立教学院史資料センターの調査・研究活動のなかで補っていきたいと思います。立教学院百五十年史編纂委員会では、引き続き第二巻、第三巻の刊行を進めてまいりますので、これまで以上のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。